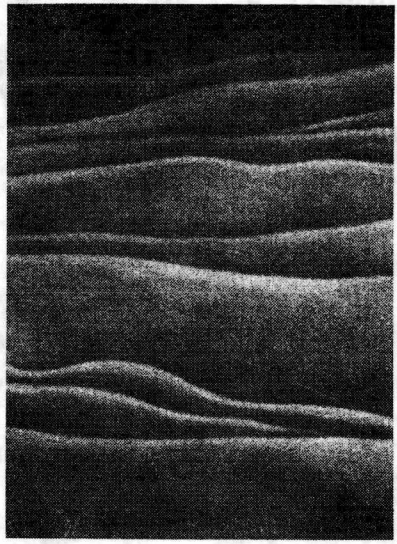
詩集

遍歴の海



永野昌三

著者
永野昌三（ながの・しょうぞう）
昭和15年生まれ。埼玉県出身。
現在，日本詩人クラブ会員。
「地球」同人「あいなめ」同人
著書　詩集『海の朝』『影の挨拶』『影』
現住所　埼玉県越谷市下間久里189—4　〒343

＊詩集　遍歴（へんれき）の海（うみ）
1985年1月5日　初版第1刷
定価1800円
著　者　永野昌三
装　画　新井豊美
発行人　大久保憲一
発行所　株式会社花神（かしん）社
東京都千代田区猿楽町2—2—5　興新ビル605　〒101
電話　東京・291・6569　振替　東京 2—194949

印刷・工友会印刷所
©SHŌZO NAGANO
製本・梓製本　用紙・文化エージェント
0092—840127—1092　Printed in Japan

遍歴の海 ＊ 目次

†

水——8
山茶花の咲いている空——10
橋——17
あじさい——20
遍歴の海——24
風と光と雲と——27
窓——30
演出——33
落日——36
通勤電車風景——38
夜明けの紫陽花——40
佐渡の夜——42
黎明の彼方へ——44
闇の葬列——48
公園のベンチ——52

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

†
小さい生命——56
都会の小鳥——58
猫——61
馬——62
蛇——64
亀——65
交尾——66
孔雀——68
法師蟬——70
犬——72
猫の鈴——74
あとがき——76

遍歴の海

†

水

もう帰って来ない
喉のしめりと熱い砂の光
生きることがいのちであり
去ることもいのち

女は独り
鏡の中の静寂に立つ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

風は女の髪をほぐし
色はこだまになり
こだまは水のにおいをよぶ

山茶花の咲いている空

蒼ざめる時の流れに気づくうちは
まだ生きているのだ
どんな姿
かたちのままでも

瞳の中に雪が降り
山茶花の咲いている空
灰色の海に落ちる白い匂い

匂う部屋
時の静止
沈黙の窓
何時間も立ち尽くした
光のない雲の下に
熱い血の流れだけが潮騒のように聴える
あなたの肉体も山茶花のはなびら
あなたは土の骨
甘えて絡みあった
小波の愛
憎い肉体の熱い苦悩の果ての果て
生の一瞬にすぎなかった錯乱と狂気

裏切り
路の終り
消えた影
実存の花から塵の土へ

ぼくはまだからっぽの人生を歩いている　風花がまいまいするように　そんなぼくが十八年ぶりに国分寺のあなたの家を訪れた　仏壇にかざられた写真のあなた　笑いをつくって迎えてくれた大きな清しい瞳　南国の太陽を避けているのか大きな帽子を頭にのせて　大自然を背景に坐っている　日本語の講師として数年暮らした外国はあなたの第二のふるさと

ぼくは死への道を歩むあなたの時の苦しみを知らない
ざらついた肌　落窪んだ影の瞳　放射線にやかれたあざ
の皮膚を知らない　痩せる肉　きしむ骨　肉体の反自然
の姿　だが眼の前のあなたは美しく微笑するあなた自身
のために　笑いの中に託した笑いの謎をそのままに　元
気だった頃の甘い果実のような声
今はあなたが残した淋しい微笑

癌

不条理の死

闇夜の目覚める部屋で眼を閉じた
死の床で時を聴く

あなたの苦悩の瞳
痛みの肉体の叫び
ふるえながら
叫びの影をそっと
誰かが覗いたに違いない

朝を待つための永い沈黙
闇は重くまぶたに落ちる
眠りは去り
だるい肉体の寝返り
深淵の闇に生きるもう一つの夜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com